『感情教育』における感覚的体験

木内 尭

はじめに

ギュスターヴ・フローベールの小説『感情教育』（1869）の結末は、主人公フレデリックとその親友デローリエが、思春期の夏の思い出を振り返る場面を描いている。その思い出とは、娼家へ二人で行こうとして、しかし目的を達成できないまま、逃げ帰ってきてしまったというものだ。この失敗談を語り終えた後で、フレデリックが「あの頃がいちばんよかったな[1]！」と述べ、デローリエもその同じ言葉を繰り返して、小説は幕を閉じる。

「あの頃がいちばんよかったな！」という、主人公の最後のセリフは、小説全体を要約する言葉でもあると考えることができるのではないか。娼婦を買おうとして失敗した思い出を振り返って、「あの頃がいちばんよかった」とフレデリックが思うのは、それが、潜在的な可能性を前にして、期待に胸を躍らせる瞬間であったからだろう。このエピソードに限らず、『感情教育』の中には、これから起きるかもしれないことに対して、期待に胸を膨らませる瞬間がいくつもある。小説の最後の言葉は、これらの希望に満ちていた時間に向かって発せられたものであると、考えることができるだろう[2]。

本論では、フレデリックが期待に胸を膨らませるそれらの瞬間が、どのように描かれているのかを考えてみたい。というのは、フローベールは、フレデリックが何かに期待して高揚感を覚える瞬間を、単なる心理描写によってではなく、ある独特の体験として描いているからだ。それは具体的には、朝の新鮮な空気を吸ったり、風の匂いを嗅いだり、鐘の音を聞いたりすることによって、世界の豊かさを享受しようとする体験である。そのような体験の

---

[1] Gustave Flaubert, *L'Éducation sentimentale*, éd. Pierre-Marc de Biasi, Le Livre de Poche classique, 2002, p. 626.

[2] 娼家のエピソードについては、ヴィクトール・ブロンベールが詳しく論じている。ブロンベールによれば、このエピソードには作品の基本的な主題がすべて凝縮されているという。Victor Brombert, *Flaubert par lui-même*, Seuil, « Écrivains de toujours », 1971, pp. 98-100.

ことをとりあえず、感覚的体験と呼んでおきたい。この感覚的体験によってフレデリックの期待感や幸福感が描かれているということを、本論では示そうと思う。

もっとも、『感情教育』という、ある一人の若者の失敗に終わった人生を描いた小説を論ずるにあたって、期待だとか幸福だとかいった言葉を口にするのは、滑稽な振る舞いであるかもしれない。しかし、この小説の中で、主人公が何かに期待する瞬間が繰り返し描かれているのはたしかなことであるし、また、期待が常に裏切られるものであるのだとしても、その瞬間がフレデリックにとって至福のときであることに変わりはない。本論では、期待はいつも幻滅に変わるという事実を念頭に置きながらも、期待することの甘美さに焦点を当ててみたい。

1

そこで、視覚と聴覚を例に挙げて、フレデリックの内面が外界を媒介として描かれるということを示すところから始めたい。フローベールの小説において、内的世界（登場人物たちの感情や意識）と外的世界（彼らを取り囲む風景や事物）は、密接に結び合わさっている。外界の風景や事物に登場人物の心理が反映される一方で、人物の内面は外界の変化に大きく左右される。つまり、＜外＞への＜内＞の反映と、＜内＞への＜外＞の影響という、双方向の運動が存在している。というかむしろ、＜内＞が＜外＞へといったん放射され、それが再び＜内＞へと戻ってくるという、往復運動として捉えるべきかもしれない。いずれにしても、内的世界と外的世界の間にはある種の照応関係が成立しており、フローベールは、風景や事物を媒介としながら、登場人物の感情や意識を描く[3]。

フローベールの小説の中で描かれる風景や事物には、多くの場合、登場人物の倦怠感が反映されている。たとえば、『感情教育』第 1 部第 5 章で描かれるカルチエラタンの情景には、退屈な夏休みを過ごすフレデリックの倦怠感が映し出されていると考えることができる。しかし、それとは反対に、風景が彼の幸福感の反映となる場合もある。同じく第 1 部第 5 章で、法学部の

[3] フローベールの小説における内的世界と外的世界の関係については、主に以下の三つの研究を参照されたい。Erich Auerbach, *Mimésis : la représentation de la réalité dans la littérature occidentale*, traduit de l'allemand par Cornélius Heim, Gallimard, 1968 ; Georges Poulet, *Les Métamorphoses du cercle*, Plon, 1961 ; Jacques Neefs, « La figuration réaliste, l'exemple de *Madame Bovary* », *Poétique*, n° 16, 1973.

試験に無事合格し、またアルヌー夫人とも仲良くなれそうだという確信を抱いたフレデリックが、ブールヴァールを散歩するとき、パリの情景は彼の幸福感を映し出す。

> ばら色の雲が、肩掛けのようなかたちをして、屋根の向うにつづいていた。人々は商店の日除けを上げ始めているところだった。散水車がほこりの中に一雨撒いてゆき、すると不意に涼しい風が立ち上って、カフェの発散する臭気に混じるのだった。開け放たれたカフェの扉からは、銀食器と金の装飾の間に、高い鏡に映った花束が見えた。群衆はゆっくりと歩いていた。歩道の真ん中でグループになって立ち話をしている男たちもいた。女たちは、柔和な眼をして、うだるような暑さが女性の肌に与えるあの椿色に頬を染めて、通り過ぎていった。何か途方もないものが溢れ出して、家々を包み込んでいた。パリが今まで彼にこんなにも美しく見えたことはなかった。彼は未来の中に、愛に満ちた年月の果てしない連なりしか見なかった[4]。

ここでは、夏の夕暮れ時のパリの風景が描かれている。夕陽に染まる雲や店じまいの光景が、少しずつ夜へと向かう夕方の時間的な変化を強調している一方で、大気中の温度の変化もまた綿密に描き込まれている。特に、散水車が撒く水によって生じる「涼しい風」に注目しておきたい。フローベールの小説世界において「涼しさ」は「解放感」をもたらす要素であると、ピエール・ダンジェが指摘しているが[5]、『感情教育』では「涼しさ」は主人公の幸福感と結び付く。ここはその一例だ。

このパリの風景を見て、フレデリックはかつてないほど美しいと感じ、そして自らの未来に希望を抱く。フレデリックの眼にパリの街が美しく映ずるのは、彼自身の心がすでに希望に満ち溢れているからに他ならない。小説中、ブールヴァールの風景が描写されるのは実はこれが二度目なのだが、前回はフレデリックが退屈な毎日を送っていた最中であったために、パリにもその倦怠感が反映されていた。ところが、その同じ風景が、それを見る人の心理的な変化によって美しいと感じられる。

とりわけ印象的なのが、ブールヴァールを行き交う人々に向けられるフレデリックの視線の変化だ。一年前、退屈しのぎに散歩をしていたとき、特に彼の不快感をかきたてたのが、ブールヴァールの通行人たちであった。「人々の表情の卑しさ、話題のくだらなさ、汗ばんだ額に浮かび上がっている愚かな充足感に、彼は本当に胸が悪くなる思いだった。しかし、この人間たちよ

---

[4] *L'Éducation sentimentale*, p. 160.
[5] Pierre Danger, *Sensations et objets dans le roman de Flaubert*, Armand Colin, 1973, p. 297.

りも自分が優っているという意識が、彼らを見ることで生じる疲れを和らげていた[6]。」フレデリックのこの侮蔑的な視線は、実のところ、自分自身に対する不満足の裏返しでしかない。他人に対して優越感を覚えることで、自分の腑甲斐なさから目を逸らそうとしている。ところが今回は、このような侮蔑的な眼差しは影をひそめ、「歩道の真ん中でグループになって立ち話をしている男たち」に特に嫌悪感を抱くこともなく、女性たちにいたっては、むしろ官能的な姿でフレデリックの眼に映じているようだ。このような視線の変化は、言うまでもなく、彼自身の心理的な変化によって生じたものだ。フレデリックの心情は、彼の眼にどのようにパリの街やパリの人々が映っているかによって、間接的に描かれている。

このブールヴァールの描写は、「涼しい風」や「カフェの発散する臭気」など、触覚的ないし嗅覚的な細部を多少含んではいるものの、全体としては視覚的なものであると言える。ところが、視覚によってではなく聴覚によって、フレデリックの期待感や幸福感が描かれることもある。

フローベールの小説の中で鳴り響く音は、登場人物たちの内的世界と密接にかかわっている。たとえば、『感情教育』には噴水がたびたび登場するが、その音は主人公の幸福感といつも結び付く。なにしろフレデリックは、噴水のささやきを聞きながら暮らすことを夢見ているのだし（第1部第5章）、フォンテーヌブローでは愛人のロザネットと、実際に噴水のささやきを耳にしながら束の間の幸福を味わう（第3部第1章）。フィリップ・デュフールの言うように、フレデリックにとって噴水は「夢の必要不可欠な構成要素[7]」である。小説全体を支配する水の主題系の中に噴水を位置づけるとしたら[8]、その音は、水平方向に流れ去る水に逆らって、尽きることなく溢れ出しつづけるという印象を与えてくれるものであるに違いない。

このように、ある特定の音がフレデリックの幸福感と結び付いている一方で、音を聞くという体験を通じて、彼が将来に希望を抱く瞬間が描かれることもある。フォンテーヌブローのエピソードの中には、フレデリックが井戸の音を聞いて、胸を高鳴らせる場面がある。噴水と同じく、井戸もまた、水

---

[6] *L'Éducation sentimentale*, p. 130.

[7] Philippe Dufour, *Flaubert ou la prose du silence*, Nathan, 1997, p. 25.

[8] 『感情教育』における水の主題系については、ベルナール・マッソンの論考を参照のこと。Bernard Masson, « L'eau et les rêves dans *L'Éducation sentimentale* », *Europe*, n° 485-487, 1969.

を上昇させる装置であるところが興味深い。フレデリックがロザネットとセーヌ川沿いを散歩している場面だ。

> 宿の近くで、麦わら帽子をかぶった少女が井戸から桶を引き上げていた。
> —— 桶が上がってくるたびに、フレデリックは言いようのない喜びを感じながら、鎖のきしむ音に耳を傾けた。
> 生涯の終わりまで幸せであることを彼は信じて疑わなかった。それほど今の幸福が、自分の人生とこの女性の人柄とにふさわしく、自然なものであると思われたのだ[9]。

井戸から水を汲み上げる少女の姿は、どことなく官能的なものではないか。アルヌー夫人の存在が「理想的な風景」を創り出すのに対し、ロザネットの存在は「淫らな風景」を生み出すと、ジャン=ピエール・リシャールが論じているが[10]、この場面においても、フレデリックがロザネットと一緒にいることによって、風景が官能性を帯びているように思われる。『ブヴァールとペキュシェ』の第6章にも、女中がポンプで水を汲み上げている姿を見て、ペキュシェが年甲斐もなく欲情にかられてしまう場面があるように、地下から地上へと水を汲み上げるイメージは、何かしら扇情的なものである。

水を汲み上げる際に生じる、井戸の鎖のきしむ音を聞いて、フレデリックは「言いようのない喜び」を感じ、そして自らの将来に確固たる自信を抱く。フレデリックが井戸の鎖の音を聞いて快感を覚えるのは、彼がこのフォンテーヌブローでロザネットと「蜜月[11]」を過ごしているかのような幸福感に浸っているからだ。フレデリックは自らの内面の反響を音の中に聞き取り、そしてその音の響きが、彼の幸福感を増幅させている。

ただし、井戸の鎖の音を聞くフレデリックの喜びは「言いようのない」ものであって、漠然とした印象がつきまとう。ブールヴァールの描写においても「何か途方もないもの」が街中を漂っていたように、フレデリックが期待感を覚えるとき、正確には言い表すことのできない、漠としたイメージが現れることに注意しておきたい。

またこのように、フレデリックの期待感や幸福感を、彼が目にする風景や彼が耳にする音を介して描くことは、フレデリックを外界の現象に対して極端に感じやすい人物として描くことでもある。パリの街がどれだけ美しく見

---

[9] *L'Éducation sentimentale*, p. 486.
[10] Jean-Pierre Richard, « La création de la forme chez Flaubert », dans *Littérature et sensation : Stendhal Flaubert*, Seuil, « Points », 1990, pp. 219-222.
[11] *L'Éducation sentimentale*, p. 486.

えようが、また井戸の鎖の音がどれだけ耳に心地良いものであろうが、それは本来的には、彼が自分自身の将来に対して抱く希望とは、何の関係もないはずである。にもかかわらず、フレデリックは外界の現象と自分の内面との間に、照応関係を恣意的に作り出してしまう。自分の周囲の環境に対するこのような態度は、フレデリックという人物のナイーヴさを暗に示してもいるだろう。

2

『感情教育』の主人公が期待に胸を膨らませる瞬間は、感覚的体験として描かれている。感覚的体験とは、都市の情景を眺めたり、自然の音に耳を澄ませたりすることによって、世界の豊かさを享受しようとする体験のことだ。ただし、この体験は視覚と聴覚のみに限られるわけではない。期待に胸を膨らませる瞬間にフレデリックが最も頻繁にする動作は、見ることでも聞くことでもなくて、匂いや空気を吸い込むことである。「吸い込む」という行為を通して、フレデリックの期待感や幸福感はしばしば描かれている。まずは、匂いを吸い込むこと、すなわち嗅覚を取り上げてみよう。

視覚が距離を介する感覚であるのに対し、嗅覚は距離を消滅させる、というか少なくとも、距離がなくなったかのような印象を与えてくれる感覚だ。しかしその一方で、匂いはすぐに消えてしまうものであるのだから、嗅覚は不確かなものでもある。もっとも、そのような不確かさは、フレデリックの移り気な性格を表現するのには、似つかわしいものであるのかもしれない。二月革命の際、フレデリックがにわかに革命への熱狂を覚える瞬間は、匂いを嗅ぐという体験によって描かれている。

> 好戦的な気質ではないフレデリックも、自らのガリア人の血が騒ぐのを感じた。熱狂した群衆の磁気が彼をひきつけていたのだった。火薬の香りに満ちた、騒然とした空気を、彼は陶然として吸い込んだ。そうしている間に、広大な愛と崇高で普遍的な感動の息吹に、身を震わせた、まるで全人類の心臓が自分の胸の中で鼓動しているかのように[12]。

「ガリア人の血」という表現は二重の意味にとることができる。革命との関連から、「（ガリア人の後裔としての）フランス人の血」という意味にも当然とれるが、「（ガリア人のように）陽気で淫らな血」という性的な意味

[12] *Ibid.*, p. 435.

を含んでいると考えることもできる。実際、ここでのフレデリックの興奮は、ほとんど性的なものであると言っていい。周囲の大気を「陶然として」吸い込み、愛の息吹に身を震わせているのだから。

革命の傍観者でしかなかったフレデリックは、火薬の匂いを嗅ぐことによって、言ってみれば人類愛に目覚める。しかし、匂いがすぐ消えてしまうものであるように、彼の熱狂もやがて冷めてしまうものだ。「まるで全人類の心臓が自分の胸の中で鼓動しているかのように」という誇張的な比喩は、フレデリックの熱しやすく冷めやすい性格を皮肉っている。政治に対する一時的な熱狂がこのように嗅覚を通して描かれるのと同様に、恋愛における束の間の幸福も匂いを嗅ぐことによって表現される。たとえば、フォンテーヌブローに滞在中のフレデリックとロザネットは、風の匂いを嗅ぐ。

> ある丘の上に二人並んで立って、彼らは風の匂いを吸い込みながら、自由な生活を誇る気持ちが、ありあまるほどの力、理由のない喜びとともに、心の中に流れ込んでくるのを感じるのだった[13]。

ここでは、フレデリックとロザネットの期待感が、風の匂いを嗅ぐという行為を通して描かれている。風の匂いが体の中へと入ってくるのと同時に、新しい生活に対する自信が心の中へと入ってくるかのように感じられる。つまり、外部から内部へという運動が、身体的な次元と心理的な次元とで二重に行われている。このような特別な体験を二人に共有させることによって、恋人同士の感情の融合を描いているのだとも言えるだろう。ロザネットとではなく、アルヌー夫人と一緒にいるときにも、フレデリックは周囲の空気を吸い込もうとする。たとえば、夕闇迫るパリの街中を、フレデリックがアルヌー夫人と歩いているとき。

> もう暗くなっていた。寒々とした天気で、家々の正面をぼかしている濃い霧が、大気中で悪臭を発していた。フレデリックはその大気をうっとりと吸い込んだ。なぜなら、服の生地を通して、彼女の腕のかたちが感じられたからだ。それに、二つボタンのカモシカ皮の手袋に包まれた彼女の手、彼が接吻で覆ってしまいたいと思う彼女の小さな手が、彼の袖の上に寄り添っていた[14]。

服の上からではあるけれども、アルヌー夫人の腕と手がフレデリックに触れている。『感情教育』において、触覚は言及されることが比較的少ない。

---

[13] *Ibid.*, p. 483.
[14] *Ibid.*, p. 133.

湿度や温度が肌に感じられることは多々あっても、身体的接触は稀であり、むしろその希少さゆえに価値を持つ。ここは、フレデリックとアルヌー夫人の身体的な接触が描かれる数少ない場面の一つである。フレデリックがパリの悪臭を「うっとりと」嗅いでしまうのは、アルヌー夫人に触れているからだ。触覚の快感が、嗅覚にまで伝染しているのだと言えるだろうか。

興味深いのは、フレデリックが感情の昂りを覚えると周囲の大気をとにかく吸い込もうとすることだ。それが悪臭であったって構わない。大気を吸い込むことによって、フレデリックは自らの幸福を確かなものにしようとしているのではないか。

「（匂い）を吸い込む」（humer）ことによってではなく、「（空気）を吸い込む」（aspirer）ことによって、フレデリックの期待感や幸福感が描かれる例を、次に取り上げてみたい。指摘するまでもないことだが、aspirer というフランス語の動詞には、「吸い込む」という意味のほかに「憧れる、熱望する」という意味もある。面白いことに、フレデリックが何かを吸い込むとき、その動作はしばしば彼の憧れや熱望の表れとなる。たとえば第 2 部第 1 章で、叔父の遺産を相続することが決まったフレデリックが、数年ぶりにパリへと戻ってくるとき。

> セーヌ川は、黄色っぽくなって、橋の床板にほとんど届きそうな勢いだった。そこから涼しい風が立ち上っていた。フレデリックはその涼しい風を力一杯吸い込んだ、恋愛の息吹と英知の発散を含んでいるかのように思われる、パリのこの快い空気をゆっくりと味わいながら[15]。

フレデリックは「涼しい風」を吸い込む。先に述べたように、「涼しさ」は彼の幸福感と結び付く。パリの空気は何か精神的な要素を含んでいるかのようにフレデリックには感じられるのだが、「恋愛の息吹と英知の発散」とは、要するに、これから再び始まろうとしているパリでの生活に彼が期待しているものに他ならない。フレデリックはパリの空気を吸い込むことによって、そこでの生活が彼にもたらしてくれるはずのものを、いち早く自分の中に取り入れようとしている。新しい生活への期待感が空気を吸い込むことによって示される例はほかにもある。第 1 部第 5 章で、夢にまで見た共同生活を始めたばかりのフレデリックとデローリエは、朝の新鮮な空気を吸い込む。

---

[15] *Ibid.*, p. 180.

朝、二人はシャツのままテラスを散歩した。太陽が昇り、薄もやが河の上を漂い、隣の花市場では小犬の鳴き声が聞こえた。 —— 二人のまだはれぼったい眼を冷やしてくれる、澄んだ空気の中で、パイプの煙が渦を巻いていた。その澄んだ空気を吸い込むと、彼らは大きな希望が広がってゆくのを感じるのだった[16]。

ここでは、フレデリックとデローリエが新しい生活に希望を抱いている様子が、空気を吸い込むという体験を通して描かれている。二人の人物が同一の体験をすることで、友人同士の連帯感が描かれているのだとも言えるだろう。空気を吸い込む動作は、視覚や聴覚と比べて、身体の内部と外部をより密に交流させるものだ。なぜなら、空気は体の中へと入り込んでくるのだから。二人は「シャツのまま」でいることによって、体全体で空気と触れ合おうとしているかのようでもある。実際、その「澄んだ空気」は、彼らのはれぼったい眼を冷やしてくれる。また、空間描写の順序に目を向けてみると、「太陽」→「薄もや」→「隣の花市場」→「パイプの煙」と、遠くから近くへという順になっていることがわかる。このような求心的な運動の最後に、空気を吸い込む動作は位置している。そのために、二人はまるで空間全体を吸い込もうとしているかのようでもある。

空気を吸い込む動作に、視覚と聴覚があいまって、フレデリックの期待感が描かれる例を最後に挙げておきたい。第1部第4章で、アルヌー夫人の家を初めて訪れたフレデリックが、その喜びを抑えることができずに、夜道を彷徨しているところだ。

フレデリックはポン・ヌフ橋の中央で立ち止まっていた。帽子を脱ぎ、胸先を広げて、彼は空気を吸い込んだ。そうしている間に、何か尽きることのないもの、眼下の水面の波の動きのような、全身を麻痺させる情愛の奔流が、自分自身の内奥から込み上げてくるのを感じた。教会の時計がゆっくりと時を打った。彼を呼んでいる声のようであった。

そのとき、一段高い世界へと運ばれたかのように感じられるあの魂の震えの一つに、彼は襲われた。ある並外れた能力が、その目指す対象はわからなかったが、彼に生じていた[17]。

ポン・ヌフ橋で立ち止まったフレデリックは、最初に、空気を吸い込む。「帽子を脱ぎ、胸先を広げて」とあるように、ここでも彼は体全体で空気と

---

[16] *Ibid.*, p. 112.
[17] *Ibid.*, pp. 107-108.

触れ合おうとしている。空気を吸い込んだことによって、フレデリックの内面には変化が生じる。「何か尽きることのないもの」という漠としたイメージがここにも現れるが、むしろ注目すべきは、フレデリックの内面の動きを描写するにあたって、彼の眼下を流れるセーヌ川の波の動きが比喩として用いられていることだろう。つまり、登場人物が目にしている外界の光景が、心理描写の比喩として扱われているのである。しかし、これは単なる修辞ではなくて、登場人物の実感に基づく比喩であると言える。フレデリックには、自分が見ている光景と、自らの内面の動きとの間に、照応関係があるかのように感じられている。そのことは、「眼下の水面の動きのような」という比喩に限らず、「何か尽きることのないもの」や「情愛の奔流」など、一連の液体的なイメージが用いられていることからも明らかだろう。

つづいて、教会の鐘がゆっくりと時を打つ。この一節に関しては、マクシム・デュ・カンが、鐘の音がゆっくりとなるはずがないと指摘しているが、フローベールはこの指摘を却下している[18]。それはおそらく、興奮のあまり通常の知覚能力を失ったフレデリックの耳に、鐘の音がどのように聞こえているのかを、ここでは描こうとしているからだ。その鐘の音が、フレデリックには、自らを呼ぶ声であるかのように感じられる。もちろん、鐘の音は時を刻むということ以外に、何も意味しはしないのだが、フレデリックはそこに自らの内面への呼応を聞き取っている。

この音を聞く体験を契機にして、フレデリックは「魂の震え」に襲われる。空気を吸い込んだときの心理的変化が「そうしている間に」（Cependant）という副詞によって導かれていたのと同じく、音を聞いたときの変化も「そのとき」（Alors）という副詞によって導かれている。たった一つの副詞によって前後関係が説明されることで、フレデリックの反応のナイーヴさが強調されていると言えるだろう。「途方もない能力」が自らに備わっていると感じたフレデリックは、この直後、画家になることを決意する。しかし、その決意が長続きするものでないことは、言うまでもない。

3

フレデリックが期待に胸を膨らませる瞬間は、見ることや聞くことによってだけではなく、匂いや空気を吸い込むという体験によって描かれている。

---

[18] Voir Pierre-Georges Castex, *Flaubert : L'Éducation sentimentale*, SEDES, 1989, pp. 214-215.

この「吸い込む」という動作に関して、『感情教育』以前の二つの作品、『ボヴァリー夫人』（1857）と『サラムボー』（1862）を参照しておきたい。というのは、この動作はフローベールにおいて独特の用いられ方をしており、『感情教育』における感覚的体験の意味を理解する上で、このような補助線を引くことは必要不可欠であると思われるからだ。『感情教育』よりも前に書かれたこの二つの小説においても、吸い込む動作はそれぞれ特徴的な用いられ方をしている。両作品では、吸い込むことが「涼しさ」の主題系と常に共にあることを、あらかじめ指摘しておきたい。その上でまずは、『ボヴァリー夫人』を取り上げることにしよう。『ボヴァリー夫人』で吸い込む動作が最初に現れるのは、シャルル・ボヴァリーの学生生活を描いた場面においてである。舞台はルーアンだ。

> 夏の美しい夕方、生暖かい街路に人気がなくなり、女中たちが家の戸口で羽根つきをして遊ぶ時間に、彼は窓を開き、そこに肘をつくのだった。［…］正面の、屋根の向う側には、澄みきった大空が広がり、赤い夕日が沈もうとしていた。あそこに行けばどんなに気持ちがいいだろう！　ブナ林の下はどんなに涼しいだろう！　彼は鼻孔を開いて田園の美味しい香りを吸い込もうとしたが、その香りはここまで届きはしなかった[19]。

この場面は、フローベールにおける吸い込むことの意味を、端的に示している。最初、シャルルは遠くの田園をただ眺めている。近くと遠く、都市と田園、生暖かさと涼しさが、ここでは明確に対比されている。試験勉強のため都市空間に閉じ込められているシャルルは、開放的な田園に憧れる（「あそこに行けばどんなに気持ちがいいだろう！」）。しかし、先にも述べたように、視覚は距離を介する感覚だ。この距離を乗り越えるために、シャルルは田園の匂いを吸い込むことによって、憧れの対象との一体化を試みる。しかしながら、田園の匂いはシャルルのところまでは届かず、一体化の試みは失敗に終わる。

この小説の主人公であるエンマ・ボヴァリーの吸い込む動作も、しばしば描かれている[20]。ここで注目したいのは、物語のどのような展開において、エンマのこの動作が描かれるのかということだ。結論を先に言ってしまえば、幸福の訪れを予期したときに、エンマは周囲の空気や風を吸い込む。たとえ

---

[19] Flaubert, *Madame Bovary*, éd. Jacques Neefs, Le Livre de Poche classique, 1999, p. 65.

[20] エンマの吸い込む動作については、「息の主題系」の一環として、ジャン=ルイ・カバネスも取り上げている。Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la Maladie dans les récits réalistes (1856-1893)*, Klincksieck, 1991, t. I, pp. 361-363.

ば、ヴォビエサールの舞踏会で、「彼女はまぶたを冷やしてくれる湿った風を吸い込んだ[21]。」または、農業共進会の場面でロドルフに言い寄られたときに、「彼女は何度も鼻孔を大きく開いて、柱頭にからまる蔦の爽やかな匂いを吸い込もうとした[22]。」さらに、駆け落ち前々日のロドルフとの逢引で、「エンマは、眼を半ば閉じて、あたりを吹く涼しい風を胸一杯に吸い込んだ[23]。」これら三つの場面がいずれも、幸福への期待が徐々に高まる瞬間を描いているということに、異論はないだろう。エンマは周囲の環境と一体になることによって、幸福の予感を確かなものにしようとしている。

では、『サラムボー』の場合はどうだろうか。紀元前3世紀のカルタゴにおける傭兵たちの反乱を描いたこの小説で、吸い込む動作は、フレデリックやエンマの場合と同じく、登場人物たちが希望を抱く瞬間に描かれている。しかしその希望は、恋愛や新しい生活に対して抱くような希望ではない。それは、「復讐の希望」である。

> スペンディウスは、頭をのけぞらせ眼を半ば閉じて、涼しい風を胸一杯に吸い込んだ。指を動かしながら両腕を開いて、体のまわりを流れるこの風の愛撫をもっとよく感じようとした。復讐の希望が再び湧いてきて、彼を夢中にさせた[24]。

第2章で傭兵軍の一員となったスペンディウスは、風を吸い込むだけでは飽き足りず、周囲の大気と全身で触れ合おうとしている。スペンディウスが風をこんなにも心地良く感じるのは、彼が地下牢から脱出してきたばかりであるからだ。つまり、閉鎖的な空間から開放的な空間へと脱出した喜びが、風を吸い込み、風と触れ合うことによって表現されている。しかしそれだけではない。風との交流を通して、カルタゴに対する復讐心が湧いてくる。スペンディウスが「復讐の希望」を抱く瞬間は、風を吸い込む仕草を通して描かれていると言えるだろう。反対に、カルタゴ側に希望が生まれるときにも、同じ仕草が見出される。第14章で、カルタゴは傭兵軍に包囲されて、水不足に苦しめられる。雨がようやく降ったときに、市民たちは湿った空気を陶然として吸い込む。

---

[21] *Madame Bovary*, p. 123.
[22] *Ibid.*, p. 246.
[23] *Ibid.*, p. 310.
[24] Flaubert, *Salammbô*, éd. Gisèle Séginger, GF Flammarion, 2001, p. 84.

> 涼しさが徐々に広がっていった。彼らは、手足を動かしながら、湿った空気を吸い込んだ。こうした陶酔を喜ぶ気持ちの中から、まもなく大いなる希望が現れた。悲惨な出来事はすべて忘れ去られた。祖国がもう一度よみがえった[25]。

カルタゴ市民たちの場合には、渇きから脱した喜びが、空気を吸い込むことによって表現されている。「手足を動かしながら」とあるように、彼らもやはり、全身で大気と触れ合おうとしている。この行為を通して、カルタゴ市民たちにも希望が湧いてくる。その希望とは当然、傭兵軍に対する「復讐の希望」だ。カルタゴと傭兵の戦闘を描く『サラムボー』において、両陣営にそれぞれ希望が生まれる瞬間は、風や空気を吸い込むという動作によって描かれている。

以上、『ボヴァリー夫人』と『サラムボー』の二作品を参照してみて理解されたことは、フローベールが「吸い込む」という動作を、ほぼ一貫して、登場人物が希望を抱く瞬間に用いているということだ。もちろん、その希望がどのようなものであるのかは、作品の性格によって異なるわけだけれども、吸い込むことを通して登場人物の内面の高揚が描かれるということに変わりはない。

最後に、フローベールにおける吸い込むことの意味を、定義しておくとすれば、それは、「触れることのできないもの」との一体化の運動であると言えるのではないか。吸い込むこととは、単に、匂いや空気を体内へと取り込む動きであるだけではない。ある時にはそれは、たとえばシャルルのように、憧れの対象との一体化を図る動きであり、またある時には、エンマのように、自分を取り囲む空間と一体になろうとする動きである。いずれの場合にも、「触れることのできないもの」との一体化が試みられる。距離によって隔てられているために、あるいは形を持たないために、「触れることができないもの」を、フローベールの登場人物たちは吸い込もうとしている。

おわりに

フレデリックが期待に胸を膨らませる瞬間はどのように描かれているのかという問いを出発点に、本論では、『感情教育』における感覚的体験の諸相の分析を試みた。フレデリックの期待感や幸福感は、単なる心理描写によってではなく、彼自身が体験する感覚の喜びを通して、描かれる。特に本論で

---

[25] *Ibid.*, p. 334.

は、匂いや空気を吸い込むという動作に注目をした。「触れることのできないもの」との一体化を試みるこの動作を通して、フレデリックが期待に胸を膨らませる瞬間はしばしば描かれている。

最初にも述べたように、フレデリックの期待は必ず幻滅に変わるのであり、彼が本当の意味での幸福を味わうことはけっしてない。しかし、フレデリックは、これらの感覚的体験を通して、少なくとも幸福の前味だけはたしかに味わっているのであり、それこそが、「あの頃がいちばんよかったな！」という言葉の意味するところであるのだ。